2026_0526「ナミアゲハの終齢幼虫」日々の理科 4307 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

ミカンの若葉の上に身を横たえているのは、ナミアゲハの終齢幼虫です。鮮やかな緑色の体と、体側に並ぶ白い帯模様が印象的で、まるで葉脈や葉の陰影そのもののように周囲へ溶け込んでいます。幼虫の頭部近くには大きな眼のような模様があり、一見すると小さな爬虫類の顔にも見えます。これは外敵を驚かせるための擬態の一種で、鳥などの捕食者に対する防御の役割を果たしています。

ナミアゲハの幼虫は、孵化直後から 3 齢頃までは黒褐色と白色のまだら模様をもち、鳥の糞にそっくりな姿で生活します。しかし 4 齢で大きく姿を変え、この写真のような緑色の「アオムシ型」となります。さらに終齢である 5 齢幼虫になると、体長は 4～5cm ほどまで成長し、食欲も急激に増します。ミカンやサンショウなどの葉を盛んに食べ、短期間で大きく体を成長させてゆきます。危険を感じると、頭の後ろから橙色の「臭角」を突き出し、独特の刺激臭を放つことでも知られています。

終齢幼虫の時期は、幼虫にとって最後の「食べる時代」です。暖かい季節では、終齢になってからおよそ 1 週間ほどで十分に成長し、やがて葉を離れて枝や壁などを歩き回るようになります。これは蛹になる場所を探している行動です。適した場所を見つけると、尾端を糸で固定し、胸部にも帯糸をかけて静止します。その後、「前蛹（ぜんよう）」を経て褐色や緑色の蛹となり、静かな変態の時間に入ります。柔らかな若葉の上で静止するこの幼虫の姿は、やがて空を舞う大きなアゲハチョウへと変わってゆく途中の、生命の濃密な一場面でもあります。

（2026 年 5 月下旬／北区としま若葉小学校）